

新しい授業づくりの文化をつくる

令和5年5月26日実施
「能力ベースの授業づくり実践講座」通信
第9号 E セット 授業研究会

E セット授業研究会 5月26日(月) @南千里中学校
単元名:「握手」(三省堂3年) 授業者:山野 航輝先生 (南千里中学校)

「能力ベース授業づくり実践講座」では、教材研究と授業研究会を1セットとして実施しています。今回はE セットの授業研究会を行いました。本単元では「図書館の『握手』コーナーに置くための、『南中生が読む握手』をつくる」というテーマで握手の批評文を書く言語活動を設定しました。本時は、それぞれの書いた批評文を読み合い、よりよいものに仕上げる学習でした。授業後の協議会では、「本時を通して、子供たちの読みが再構築されていたか」を論点に熱い議論を交わしました。齊藤先生のお話では、本単元で身に付けるべき「批判的思考」について、読解表現力を磨く学習過程について、質の高い批評文の実現についてお話いただきました。

E セットから学ぶ 授業づくりのポイント

「本物」との出会いを通して、「批判的思考」を育成する

➡「批判的思考」は、極めて汎用性が高く全教科で育成したい能力です。「自分がやったことが本当にいいか、正しいか」と考えるためには、大人と同系の「本物」に出会わせることが有効です。批評文を書く本単元では、大人が書いた「握手」の論考や作品分析に出会わせることで、自分の文章を批判的に思考するきっかけとなります。

授業者の提案



授業者
山野 航輝先生

Why

なぜ学ぶのか

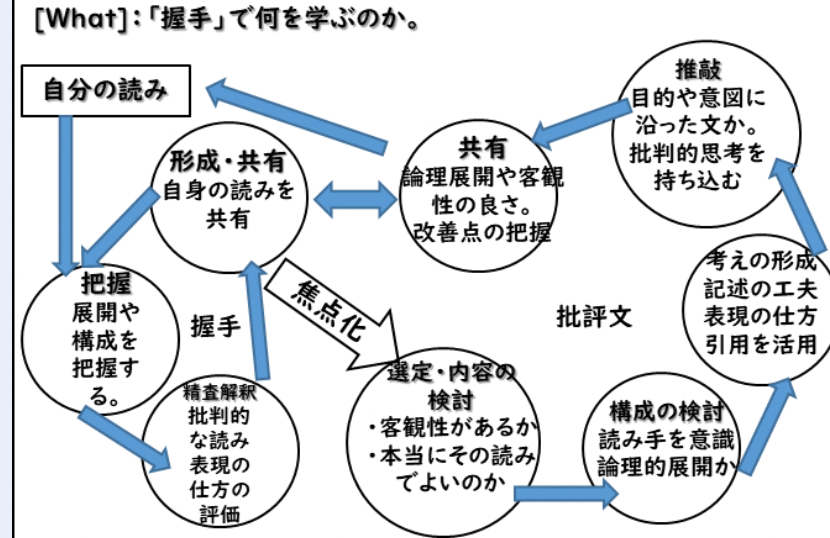
子供達が身につけるべき資質・能力は？

[Why]:なぜ「握手」を学ぶのか。
握手は時を超え、様々な世代に読み継がれてきた作品である。修道士と私の関係性や握手に込められた思いなど、時代が変わっても不変の価値や良さがある作品である。その価値を子どもたちが実感し、出会いや別れを経験する中で、活用してほしい。そして、卒業や離別を実際に経験した後など、人生のライフステージごとに、物語を読んで考えたことを振り返り、読み方の変容を実感できる作品に位置付けたい。
また、これまで様々な問いを立てて主体的に物語を読んできた子どもたちは、自分の考えを形成することはできても、互いの読みを肯定するだけで、議論するほど深まった経験がない。そのため、握手を批評することで、自分自身の読みを明確にし、自分が考える良さを伝えるために、本文を徹底的に読み、批評する力を高めたい。また、前単元で学習した「批判的な読み」を持ち込み、お互いの読みの良さや改善点を指摘し、より高度で根拠が明確になった批評文の完成を目指す過程で、読みの深まりを実感するとともに、新たな自分の課題を見付けられるようにする。「物事を批評するための思考の方法」という、汎用的な資質能力の獲得を目指すために、握手を学んでいく。

What

何を学ぶのか

子供達の学習対象は？



How

どのように学ぶのか

子供達の学習過程は？

[How]:どのように「握手」を学ぶのか。
「握手」の物語の内容について、自分が考えたり感じたことを批評する文章を書き、図書館で展示する活動を言語活動のゴールにする。「握手」は近い過去と遠い過去の内容を行き来しながら物語が展開されるため、表現の仕方の評価・展開の仕方の評価といった、文章の「形式的な良さ」を批評の視点に持ちやすい。批評文を書き上げる中で、自分の文章が多くの人が訪れる図書館に展示されることを念頭に置き、推敲を繰り返すことで自身の読みと批判的思考力を高められる授業を行いたい。
そのため、物語の気になる描写や重要な描写を自由に共有し、その中で考えたいものをクラスで焦点化して絞る。焦点化することで批評する視点をそろえ、子どもたちの自由な解釈が起点でありながら、子どもたちが議論する視点をそろえられるようにする。批評文を書くための過程そのものを経験する授業を展開することで、汎用的な資質能力に加えて、自分自身の文章を推敲する中で、自身の読みの深まりが起こることに期待したい。

本時の展開

言語活動 図書館の「握手」コーナーに置くための、「南中生が読む握手」をつくる

①ゴールを確認 前回のふりかえり	②本時の活動目標を確認	③友達の書いた批評文を読み、自分の読みと比較して、相手の批評文の良さや改善点、疑問点を伝え合う。	④もう一度物語を読む。	⑤感想と読みのデジタル化
今の批評文に書かれた自分の読みは、数字にするどれくらいのものかな？	本当にその読みで大丈夫か、議論して読みを深めよう。	本当にその読みで大丈夫か、議論して読みを深めよう。 批評文の視点をもとに、お互いの批評文の良い所や改善点を伝え合おう！	改めて読んだ内容をもとに、批評文を書き改めよう。	前回までの批評文と比較して、自分の読みが深まったかな？

齊藤先生のお話は裏面へ

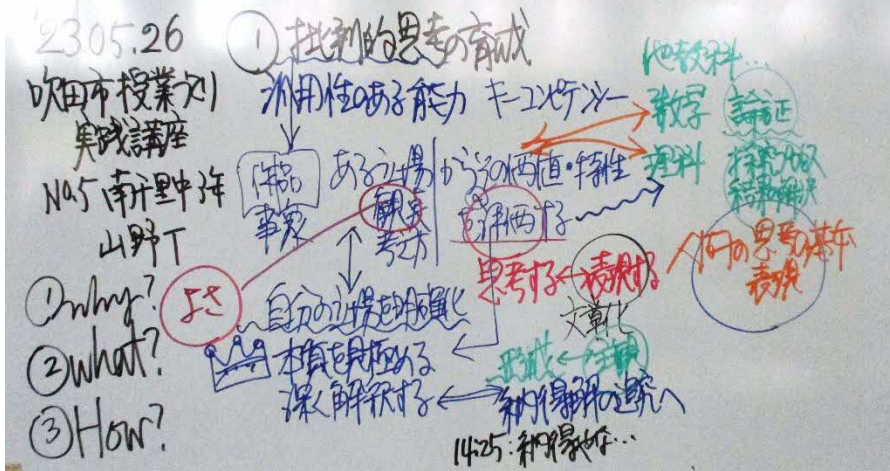
国語科の目標【学習指導要領 第2章 第1節 1教科の目標】

言葉による**見方・考え方**を働かせ、**言語活動**を通して、国語で正確に理解し適切に表現する**資質・能力**を次のとおり育成することを目指す。
(1)社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。(2)社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。(3)言葉がもつ価値を認識するとともに、言語感覚を豊かにし、我が国の言語文化に関わり、国語を尊重してその能力向上を図る態度を養う。

Why

なぜ学ぶのか

子供達が身につけるべき資質・能力は？



なぜ「批評文」なのか—批判的思考の育成

1番重要なことは「批判的思考の育成」。「批判的思考」は、極めて汎用性が高くほとんどの教科で営まれている。自分がやったことが本当にいいか、正しいか、常に考えながら前に進んでもらいたい。

今日の場合は、作品が事象。この「握手」を、「立場」や「観点」、「考え方」から、その「価値」や「特性」を評価すること。

批判的思考は、ネガティブな意味合いでなく、評価。つまり、自分が作品に対してどういう立場でいるかを表現すること。評価することは、思考すること。国語の授業の場合思考を表現するツールは言葉。今日は、評価を文章化する。これは国語ならではの。自分の立場を明確にして評価をすることは、本質を見極めること。つまり、より深く解釈する。

評価することには責任がある。批評文を書くことは感想文と違う。批評文は裏側に根拠が必要。しかし、人は感じ方が違うから、同じ言葉であったとしても判断が違う。これが国語で言う「考えの形成」というプロセス。考えの形成は、主観を入れて考えをまとめるということ。だから、同じ文章でも、それぞれの作品解釈がある。つまり、納得解を求めている。納得解の追究。

世の中はみんなそのような場面が多くある。コロナの時だって答えがなかった。どうすればいいかを考えていくことが大事であった。ここでの一連のプロセスは、他教科でもある。例えば、数学での論証の論の進め方、理科での実験の進め方や結果の解釈、体育での機械運動などがあり、学びが繋がっていく。

What

何を学ぶのか

子供達の学習対象は？



読解表現力を磨くプロセスを描く

今日の場合は、読解表現力。読解しながらの表現を磨くということをやったかった。「読む」「書く」の2つは、切っても切り離せない関係。繋げて考えた方がいい。これを磨くのは生徒。読解表現力を自らが磨くプロセスを描くということ。今日7分間説明があったが、任せればいい。生徒の有能さを信じてあげたい。

「読む」と「書く」にはそれぞれプロセスがあって、今回はどちらも「共有」場面。「読む」活動では、「共有」の中で、他者の批評文を読んで比較している。比較は、自分の考えをより豊かなものにしていけることができる。考えの「形成」の「再構築」。一方、「書く」は「推敲」をしている。

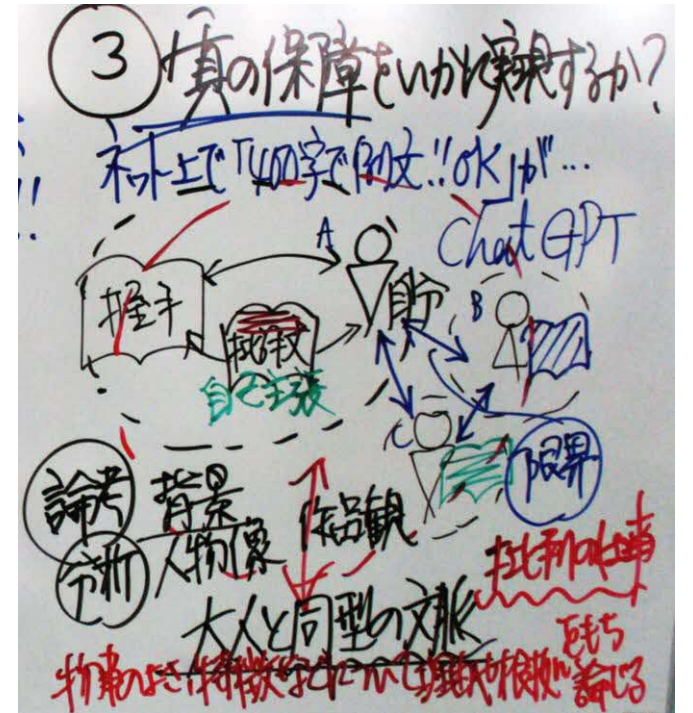
互いに「形成」し、「推敲」という一連の活動をしている。「形成」では、自分の「思考の評価」を、「推敲」では自分の「表現の仕方の評価」をしている。

さらに重要なのが、「主観の振り返り」。客観的に見たら本当にそれでいいかどうかということ。それを推し進めるのは思考。今日はそこがちょっと弱かった。根拠を明らかにして論じられてない。思考の結果を論じるっていうところまで行ってないところがあった。

How

どのように学ぶのか

子供達の学習過程は？



批評文の質の保障をいかに実現するか

今日もそれぞれがそれぞれの思いで丁寧に批評文を書いてきた。しかし、生徒が批評文の書き方やコンセプトが分からない。だから、感想文と似たようなものになってしまう。現状のスタイルではもう先にはいかない。それ以上進む余地がない。そこに刺激やインパクトを与えていくということが重要ではないか。

今日の授業で、どう工夫すればよかったのか?—大人と同系の文脈に**出会わせる**。例えば井上ひさしの「握手」に対する論考や井上ひさしの**作品分析みたいなものを平行読書で読ませる機会を与えていく**。

作者の背景が分からなければ、批評文は書けない。作者が作品を書いた時の人物像、境遇、作品観、宗教観などが分かって初めて書ける。もちろん中学校3年生の生徒が解釈できる範囲は限られている。しかし文芸評論家はそうやって書いている。そのミニチュア版を経験させる。そういうふうにして、生徒が、言葉、文章にこだわりを持ちながら、論の展開を考える。

もっと言うと、主観を振り返りながら、本当にそれでいいか常にクリティカルに考えながら客観的に考えていくという批評の仕事させたい。

【編集後記】

今回は、どの教科にも通ずる「批判的思考の育成」について考えを深めた。予測困難な社会の変化の中で、未来の創り手となる子供達に必要な力である。また、教師として自分の授業を批判的にふり返ることも極めて重要と感じた。「自分がやったことが本当にいいか、正しいか」常に考えながら授業改善を進めたい。(文責:教育センター山埜)

- 汎用性のある能力(キーコンピテンシー)でどの教科にも通ずる能力があることが分かった。大人と同型の文脈に出会わせることが大切と聞いて、小学校の話す・聞く単位にも使えそうだと感じた。(S先生)
- 大人ならどうするか、大人と同じ文脈についてまだまだ授業で行うことができていると気づきました。生徒が主体的に評価や思考することができているか、また深めることができているか考えさせられました。(H先生)